

【今日の説教から】

獄中からのパウロの励ましの手紙です。獄の中。彼には事の「成行き」(23節)も分からず、「入獄の苦しみ」(1:17)がありました。時に彼は地上から取り去られ、天の安息に入れられたいとの願いがよぎりましたが、しかし彼はピリピの教会の人たちとの再会をより強く願うのでした。

教会の外からは投獄の迫害、それに加えて内にも党派心によって行動する人たちがいました。パウロはこの教えの根幹であるイエス様のことを人々に伝えます。そして彼自身について、「祭壇に、わたしの血をそそぐことがあっても、わたしは喜ぼう」と語りました。まさにパウロは主の道を自らの道として生きました。

またテモテもそうでした。「テモテのような心で、親身になってあなたがたのことを心配している者は、ほかにひとりもない」

そしてエパフロデトもまた、死ぬばかりに「キリストのわざのために命をかけ」たのです。パウロは「人はみな、自分のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことは求めていない」と語りました。「おのの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」との通り、誰かが自分のために何かをして助けてくれるという考え方から、自らが主のために、同胞のために何ができるかを真剣に考えて、仕え合い、助け合い、キリスト・イエスの心を実現する者であります。

皆様おはようございます。

私たちは「喜びの書簡」と呼ばれるこのピリピ書を読み進めております。何度この中に「喜びなさい」という言葉が書かれていることでしょうか。

彼は獄の中におり、そして教会の外にはこうして彼を投獄するような迫害があり、教会の中にも党派心と分裂がありました。パウロはそれを見て、「わたしの入獄の苦しみに更に患難を加え」るものだと語りました。

パウロは獄の中、このまま死を覚悟する思いにもなったことだと思います。獄の中から漏れ聞こえるほかの受刑者たちの死。死を見せつけられる中にあって彼はむしろ死こそが益であると考え、いっそ旅立ちたいと願うようにさえなります。板挟みになっていると語ります。「この世を去ってキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい」と語ります。しかしそれに勝って、「肉体にとどまっていることは、あなたがたのためには、さらに必要である。こう確信しているので、わたしは生きながらえて、あなたがた一同のところにとどまり、あなたがたの信仰を進ませ、その喜びを得させようと思う」と語るのでした。

彼のそういう他者のために仕えようとする気持ちはイエス様から来るものでした。

2:1 そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御靈の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、

2:2 どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。

2:3 何事も党派心や虚栄からするのではなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。

2:4 おのれの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。

2:5 キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。

2:6 キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、

2:7 かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、

2:8 おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。

ですから、そんなイエス様の姿を見、それが誤りなきかつ力強い神様の愛と救いであることを知り、パウロ自身もこう語るのでした。

2:17 そして、たとい、あなたがたの信仰の供え物をささげる祭壇に、わたしの血をそそぐことがあっても、わたしは喜ぼう。あなたがた一同と共に喜ぼう。

2:18 同じように、あなたがたも喜びなさい。わたしと共に喜びなさい。

何かの必要に迫られれば、パウロもまた、十字架に命を捧げられた主と同様、自分のいのちさえ惜しまないと彼は語ります。

そして今日の箇所にはもう二人、そのようなパウロと思いを一つにする人たちがいたことが述べられます。

2:19 さて、わたしは、まもなくテモテをあなたがたのところに送りたいと、主イエスにあって願っている。それは、あなたがたの様子を知って、わたしも力づけられたいからである。

2:20 テモテのような心で、親身になってあなたがたのことを心配している者は、ほかにひとりもない。

2:20 テモテのようにわたしと同じ思いを抱いて、親身になってあなたがたのことを心にかけている者はほかにいないのです。(新共同訳)

テモテはこれからも、あなた方のことを心配して、気がかりに思い、世話をし、気遣い配慮してくれるだろう。彼のように、純粋に、本当に、誠実に、心からあなた方のことをこれからもそう思ってくれるという人、私パウロと同じ思いを共有している人は他に誰もいないとパウロは語ります。そんなにもテモテもまた、パウロ同様ピリピの教会を愛し、神の教会を愛していました。このテモテをピリピの教会に送って彼らを力づけたい。テモテこそが唯一の、わが想いを深く理解し、同じ心を持つ者であれば、きっとそちらに行って良き励ましを与え、問題を悟り、私のところに持ち帰って様々の協議をし、喜び、祈り、力づけられるであろうから、私は間もなく、今からすぐにテモテを送ろうとパウロは語ります。

2:21 人はみな、自分のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことは求めていない。

ここでパウロの告白があります。

テモテは唯一彼と同じ思いを共有している人ということは、他の人はパウロの深い気持ちを共有していないということです。そして、パウロの思いを共有していないということは、イエス・キリストの思いを共有していないということなのです。ここに彼の寂しさがあったのではないかでしょうか。

2:1 そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御靈の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、

2:2 どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。

2:3 何事も党派心や虚栄からするのではなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。

2:4 おのれの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。

2:5 キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。

キリストと思いを一つにしてほしい。世の罪を取り除く神の子羊として、主なるイエス様が私たちのためにどんなにつらく苦しい、いばらの道を進んでくださったのか。それはイザヤ53章にある通りです。そして私たちは仕えていただいて、贖っていただいて、身代わりになっていただいて、多くを得て、今があるというのに、どうしていつまでも仕えてもらい、助けてもらい、与えていただいて、その所から一向に前進しないのか。

「人はみな、自分のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことは求めていない。」この言葉は重く私たちに語り掛けるのではないでしょうか。

2:22 しかし、テモテの鍊達ぶりは、あなたがたの知っているとおりである。すなわち、子が父に対するようにして、わたしと一緒に福音に仕えてきたのである。

2:23 そこで、この人を、わたしの成行きがわかりしだい、すぐにでも、そちらへ送りたいと願っている。

2:24 わたし自身もまもなく行けるものと、主にあって確信している。

子が父に対するように、テモテは私に仕えてくれた。そして私と一緒に福音に仕えてきた。私に仕え、福音に仕えてきた。

この、「福音に仕える」という言葉も非常に重く心に迫ります。

(自分のことを求めずに)キリストのことを求め、(自分のことを求めずに)福音に仕えているか。

私たちは自分のことを求めるがゆえにキリストを求め、自分のメリットのためになら福音を求め、それを文字通りに良き知らせと受け止めますが、それが自らを貧しくするとか、痛みやそしりや迫害を招く時にも同様にキリストを求め、福音に仕えることが出来るのでしょうか。信仰の道に進むというときにも、自分の将来を願うというときにも、私たちはこのキリスト教が私たちに利益を与えるからこそ信じるのであって、自分が求めるようにいかない時、自分の利益にならない時にもむしろキリストを選び、むしろ福音に仕えるということが出来るのでしょうか。

23節にありますように、パウロは自分の成り行きが分からぬのです。どうなっていくか分からない、不安定な、混とんとした、悩みの中に彼はいました。しかし彼はそれを苦にしてはいませんでした。そこに悲壮感はありませんでした。彼はあっさりと、今私の成り行きは分からないが、分かり次第すぐにテモテをそちらに送る、そして私もすぐにそっちに行けると確信していると語りました。キリストとに仕え、福音に仕える者を神様は心配してくださいます。自分の必要のためら自分で求め、自分で自分のものを手に入れようと一生懸命であった時には知られなかった深い確信と平安が彼にはあったのです。

2:25 しかし、さしあたり、わたしの同労者で戦友である兄弟、また、あなたがたの使者としてわたしの窮乏を補ってくれたエパフロデトを、あなたがたのもとに送り返すことが必

要だと思っている。

2:26 彼は、あなたがた一同にしきりに会いたがっているからである。その上、自分の病気のことがあなたがたに聞えたので、彼は心苦しく思っている。

2:27 彼は実に、ひん死の病気にかかったが、神は彼をあわれんで下さった。彼ばかりではなく、わたしをあわれんで下さったので、わたしは悲しみに悲しみを重ねないですんだのである。

2:28 そこで、大急ぎで彼を送り返す。これで、あなたがたは彼と再び会って喜び、わたしもまた、心配を和らげることができよう。

2:29 こういうわけだから、大いに喜んで、主にあって彼を迎えてほしい。また、こうした人々は尊重せねばならない。

2:30 彼は、わたしに対してあなたがたが奉仕のできなかった分を補おうとして、キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになったのである。

ここでもう一人の人が登場します。それは、パウロの同労者で戦友である兄弟であるエパフロデトです。彼はピリピの教会から、パウロを助けるためにと送られた使者でした。彼はパウロを一心に助け、彼の窮状を補い助けました。

その困難と熾烈を極める働きの中、瀕死の病気にさえなりましたが、神様は彼を恵んで助けてくださいました。その病のことがピリピの教会にまで伝わり、教会が大変心配しているのを聞き、エパフロデトは心苦しく思い、パウロも大変心苦しく思っていました。獄の中、彼を助けてくれるパウロの同労者で戦友である兄弟をそばに置いておきたいと願いながらも彼のために、教会のために彼を返すことをパウロは決断したのでした。こうして人を尊重してほしい。「彼は、わたしに対してあなたがたが奉仕のできなかった分を補おうとして、キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになったのである」とパウロは語りました。

「キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになった」

これも重い言葉です。「命がけで」という言葉。時に私たちは口にする言葉かもしれません、エパフロデトは文字通り瀕死の病のその所までキリストのわざに自分をかけていきました。そんな彼を、パウロは自分自身を見るように同労者で戦友である兄弟と呼びます。

「人はみな、自分のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことは求めていない。」

「子が父に対するようにして、わたしと一緒に福音に仕えてきた」

「キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになった」

「わたしの同労者で戦友である兄弟」

私は天に休みを得ておられるパウロ先生にとってどのような存在なのだろうかなあとふと

心にそんな考えがよぎりました。今週もキリストの愛に励まされ、喜びと共に祈られ、力強く進ませていただけると信じます。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。パウロが、テモテが、エパフロディトが、自らのいのちを捧げるようにして群れの家族のため、主のために仕えた姿を知らされ、ありがとうございます。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」一人の人が、神の子が世界全ての人の罪を担われました。そして担っていただき、赦された者が、それでめでたしめでたしと自由気ままに進むのではなく、いつも与えてもらって助けてもらって当たり前ではなく、次には誰かのためになろうと仕え立ち上がるとき、主は喜んでくださると教えていただきました。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン